北海道新聞　29年9月12日朝刊

ぶらたび Hokkaido

今週のテーマ

文学の町 文人の足跡たどる

小樽市

多くの作家を育んだまち・小樽。今年7月に「影裏」で芥川賞を受賞した沼田真佑さんも小樽生まれだ。読書の秋を迎え、小樽の文学の足跡をたどった。

青年の創造力育む源

案内人
小樽報道部
徳留 弥生

JR小樽駅前から三角市場に続く階段を上ると、歌人石川啄木（1886～1912年）の歌碑（稲穂2）が見えてきた。小樽啄木会などが2005年に建てた。

子を負ひて
雪の吹き入る停車場に
われ見送りし妻の眉かな

刻まれた歌は歌集「一握の砂」にある。小樽に約4カ月間、住んだ後、家族を残し、1908年（明治41年）1月、釧路に向かった。「小樽を去る気持ちを詠んだ歌。歌碑が立つ場所に合っている」。小樽啄木会会長の浜谷貞一さん(81)が設置場所として選んだ理由を教えてくれた。

啄木の歌碑は、小樽港を一望できる水天宮（相生町）の境内にもある。

かなしきは小樽の町よ
歌ふことなき人人の
聲の荒さよ

市立小樽文学館館長の玉川薫さん(64)が「啄木の歌で『小樽』の言葉が入るのはこの一首のみ。労働者であふれていた当時の様子を詠んだもの」と解説してくれた。

多喜二ゆかりの地

水天宮は小説「蟹工船」で知られるプロレタリア作家小林多喜二（1903～33年）ゆかりの地とも言われる。毎年、命日の2月20日に開く多喜二祭の実行委事務局長の大地巌さん(74)は「多喜二と、思いを寄せた田口タキとのデートコースだったのでは」と推測する。史料に記述はないが、水天宮が2人の勤務地の中間点。境内を歩きながら、当時に思いを巡らせた。

多喜二と、1学年下で「若い詩人の肖像」の作家、評論家の伊藤整(05～69年)は小樽高商（現小樽商大）に通った。2人の学生時代を思い描きながら、小樽商大（緑3）を目指し、地獄坂と呼ばれる急な坂を上った。

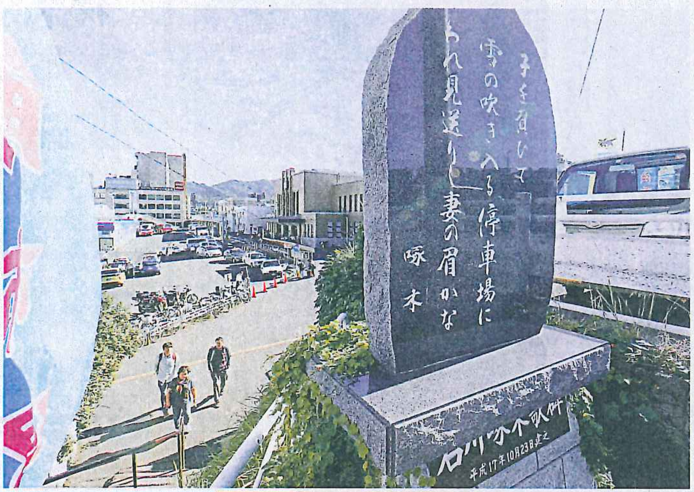
付属図書館3階に設置された大学の歴史を伝える史料展示室には、フランス語劇に出演した写真など2人に関する史料約20点がある。展示に携わった特任教授の荻野富士夫さん(64)は「成績表や進路希望などの史料はここでしか見られない。2人は特に語学の成績が良かったことが分かる」と話した。

大学近くには65年に建てられた多喜二の文学碑（緑4）があり、足を伸ばしてみた。「冬が近くなるとぼくはそのなつかしい国のことを考えて深い感動に捉えられている…」。多喜二が豊多摩刑務所（東京）で書いた手紙の一部が記されている。故郷をしのぶ気持ちが伝わってきた。

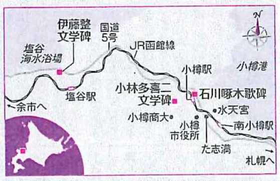
塩谷海岸望む高台

整が育った塩谷地区に車を走らせ、塩谷海岸を望む高台にある伊藤整文学碑（塩谷2）に向かった。友人が70年に建てた。「私は浪の音を守唄にして眠る…」。詩集「冬夜」収録の「海の捨児」の冒頭にある一文が刻まれている。碑文を読み、静かな日本海を見渡していると、潮風が心地よく吹き抜けた。

芥川賞作家の沼田さんは受賞作で自然の魅力を描いた。子どものころは毎年、小樽で過ごした。「小樽は文学青年が次のステージで飛躍するエネルギーに満ちた場所ではないか」。玉川さんのこの言葉がふと頭をよぎり、小樽の歴史と魅力をあらためて感じた。



JR小樽駅舎の近くに立つ石川啄木歌碑（浅利文哉撮影）



ナビ 石川啄木歌碑はJR小樽駅北の三角市場に続く階段を上ると左側にある。

水天宮は小樽駅から徒歩20分。問い合わせは道案内のみで☎0134・22・3495へ。

小樽商大付属図書館史料展示室は北海道中央バスの小樽商大前バス停で下車。平日は午前9時～午後5[illegible]土日曜は午前10時～午後5時。土日曜のみ希望者は2階閲覧室カウンターに申し出る。問い合わせは☎0134・27・5273へ。

小林多喜二文学碑は中央バスの商業高校前バス停で下車し徒歩20分。

伊藤整文学碑は中央バスの塩谷文庫歌（ぶんがた）バス停で下車し徒歩5分。

㊨小樽商大の史料展示室内にある「小林多喜二と伊藤整」のコーナー
㊧伊藤整が育った塩谷地区を見渡す伊藤整文学碑の前で解説する玉川薫さん